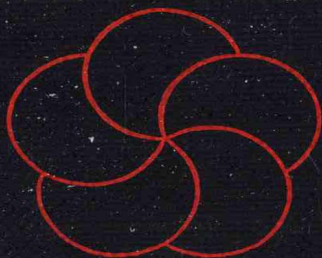
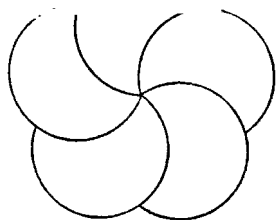


9

日本文学の歴史



近代の目ざめ



9 近代の目ざめ

日本文学の歴史

伊藤 整 下村富士男 編



日本文学の歴史（全12巻）

第9巻 近代の目ざめ

昭和43年1月20日 初版発行

定価 650 円

編 者 伊 藤 整
下 村 富 士 男
発行者 角 川 源 義

印刷所 中光印刷株式会社
製本所 株式会社 鈴木製本所
製版所 株式会社 高木写真製版所
発行所 株式会社 角 川 書 店

東京都千代田区富士見2-13
振替 東京 195208 番
電話 東京 (265) 7111 番

© Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

目次

江戸から明治へ

おかげまいりの人波 中山みきという女 一揆と信心 陽気ぐらし 世直し数え歌 適々
斎塾の乱暴書生 福沢諭吉 文明の発見 議院とはどんな役所か 四海一家五族兄弟 伊
藤俊輔 暗殺者から留学生へ 尊攘思想と開明派 年があげたら、ころっと変わるで

文明開化

菊は二度咲く葵は枯れる 幕府知識人の姿勢 精神的革命は時代の陰より 立身出世のバイブル
一身独立して一国独立す 世界は広し万国は 弥次喜多の海外旅行 牛鍋食わねば開けぬ奴
魯文の転向 説教のコミュニケーション 明六社の人々 演説と啓蒙 反近代の精神 田
舎武士の目 「つづきもの」の登場 毒婦小説の意味

士族と士族意識

家ニ不学ノ人ナカラシメン 学制と士族 右武左文は古の法なり 三尺去って師の影を踏まず
貧乏書生 外人教師と士族青年 なまずどじょうはみな官員 刀からサーベルへ 親分西郷
隆盛 民権運動の季節

近代ジャーナリズムの誕生

三

ひらけゆく報道の世界 筆禍のさががけ 近代新聞の出版 政論の花ひらく 巨星のかがや
き 暗雲深し言論界 読売屋の鈴の音 編集局は梁山伯 いずれがはやめかきつばた 小
説への郷愁 小新聞は花ざかり 漢文戯作の流行 「無用の人」の季節 文学の花ひらく

自由の歌声

二

自由の歌声 東洋のルソー 「天ヲ刺シ雲ヲウガツ」 「板垣死すとも自由は死せず」 説
みかえの季節 「これは外国のこと」 実録と小説の奇形児 凶徒囂聚 ナロードニキの爆
裂弾 鬼が泣く 脱落者北村門太郎 運動会という名のデモの列 保安条例の嵐 まこと
によろしい機嫌節 無血虫の陳列場

キリスト教と文学

二

泰平の眠りをさます蒸気船 日本英語教育発祥の地 宣教師の群れ 南北戦争生き残りの勇士
「少年よ、大志を抱け」 天皇もクリスチャンに ハイカラなミッシェン・ガールズ 元始に
神天と地を創造れり かのバビロンの水青く 「かみ」から「きみ」へ 棕櫚の町エリコの城
で 「文学界」の産婆役 情のこもる手紙も英語 黒ビロード服のセドリック 「スケッチ・
ブック」と「帰省」 背教文士と内村鑑三 「君、今何を読んでるね」 入信者と離教者

「近代」文学の成立

一八

先輩と後輩 教育家坪内逍遙 心の故郷大徳 極楽とんぼ 泣いて馬琴を斬る 文学士春
のやおぼろの誕生 志士の情熱 グレー教授とロシア文学 散文のなかの詩 ベリンズキー

と漢学 士族意識と自己意識 『浮雲』の寓意性 想と実
汝もか！ ふたりの理想主義の意味 経世家の夢 『朝日新聞』と『其面影』
太田豊太郎との距離 万里の波濤

国粹主義

天心とフェノロサ 東と西と 西洋流のエージェント 呼べど叫べど声はなく 志賀重昂の
南洋行 政教社の人々 「護国と博愛と奚ぞ撞着すること有らん」 犬養毅、決闘をせまられ
る 陸羯南と「日本」 大隈重信の失脚 ないて血をはくほととぎす 民族文化の再認識

評論家の群像

新しいジャンル 啓蒙学者の芸術論 中江兆民 経済論的な文学論——田口鼎軒 鼎軒の文
学改良論 逍遙の『小説神髓』 批評家の群像 石橋忍月の裁断批評 忍月の『浮雲』評論
鷗外・逍遙と忍月 内田不知庵の諧謔批評 風刺家としての不知庵 最初の文学概論 皮肉
屋齋藤緑雨

アルチザンの文学

勝海舟の文学論 昨日の友は今日の敵 紅葉の江戸ッ子職人芸 最初の文学同人誌 遊芸文
学からの脱皮 西鶴の発見 柗檀は双葉より芳し 若き日の露伴 露伴の文壇登場 人氣
作家ベスト・テン 紅葉と若き日の鏡花 鏡花に流れる芸の血 文壇の大御所 「我が筆と
るはまことなり」 紅露時代の終焉

近代詩歌のあけぼの

三〇六

近代詩の「夜明け前」 「山おらんだ」の歌 まぼろしのハイネ詩集 勝麟太郎と近代詩
「よい国あります」 五線譜とともに 唱歌集の出現 「千島の奥も沖繩も」 幕府派遣留
学生 赤門天狗 三人の教授たち 「新体詩」事始 「明治ノ歌ハ明治ノ歌ナルベシ」
『新体詩抄』とロマン主義 「おもかげにして見ゆとふものを」 明治版『和漢朗詠集』 南
方ロマンチズム 囀外の貴族趣味 劇詩への試み 「新しき詩歌の時」 日本的な近代詩
の新生

近代の演劇

三四四

見はてぬ夢 近代の曙光 西洋種の歌舞伎 新しい波 歴史か芸術か 兄貴は水見舞、弟
は火事見舞 洋服を着せられた黙阿弥 揺れうごく梨園 江戸の終焉と回帰 オッペケペー
女優登場 戦地ルポと翻案劇 別離の大悲劇

憲法発布から日清戦争へ

三七四

仮装の時代 青年の季節 極東の危機 一旦緩急アレバ 国会開設のための下準備 アジ
アの近代国家 上杉憲法と美濃部憲法と 欧化への反動 帝国議会ひらく 黄金政治と妥協
政治 鷲の爪の恐怖 民力休養から国権拡張へ シベリア横断と千島遠征 条約施行論のゆ
くえ 鶏の林に風たちて 道は六百八十里 帝国主義侵略の波

最初の戦後文学

四〇八

小説に時代の精神を 教育と宗教の衝突 美の女神の微笑 小説家なるもの何ぞ 雑誌創刊

の季節　くわんねん小説なんテ迷子札　戦後文学としての観念小説　硯友社のアウトサイダー
 日陰の文学者　『今戸心中』の世界　しのびよる国家主義　青春の終わり　出版予告の描いた波紋　クリスチャニズムとダーウィニズム　可能性の文学　『くれの廿八日』の意味　「不
 け犬（アンダードッグ）　神と自然と人間と　「もう女なんぞに生まれはしませんよ」　『不
 如帰』の周辺　『思出の記』——明治の青年の残像

参考文献

日本文学年表

あとがき

写真特集

伊藤博文の顔	34	民友社と政教社	240
文化人と明治百年	68	明治二十年代文学の花開く	266
士族の反乱	90	明治文壇の一大結社	304
明治初期の新聞	116	『楚囚之詩』の周辺	342
木曾路	146	明治の舞台	372
初期の和訳聖書	182	日清戦争と明治天皇	404
後年の逍遙と二葉亭	218	文学大衆化の軌道	406

本巻執筆者（五十音順）

飛鳥井雅道	興津要	鹿野政直	河竹登志夫	小玉晃一
佐藤勝	関良一	畑有三	福田清人	福地重孝
藤村道生	前田愛	吉田精一		

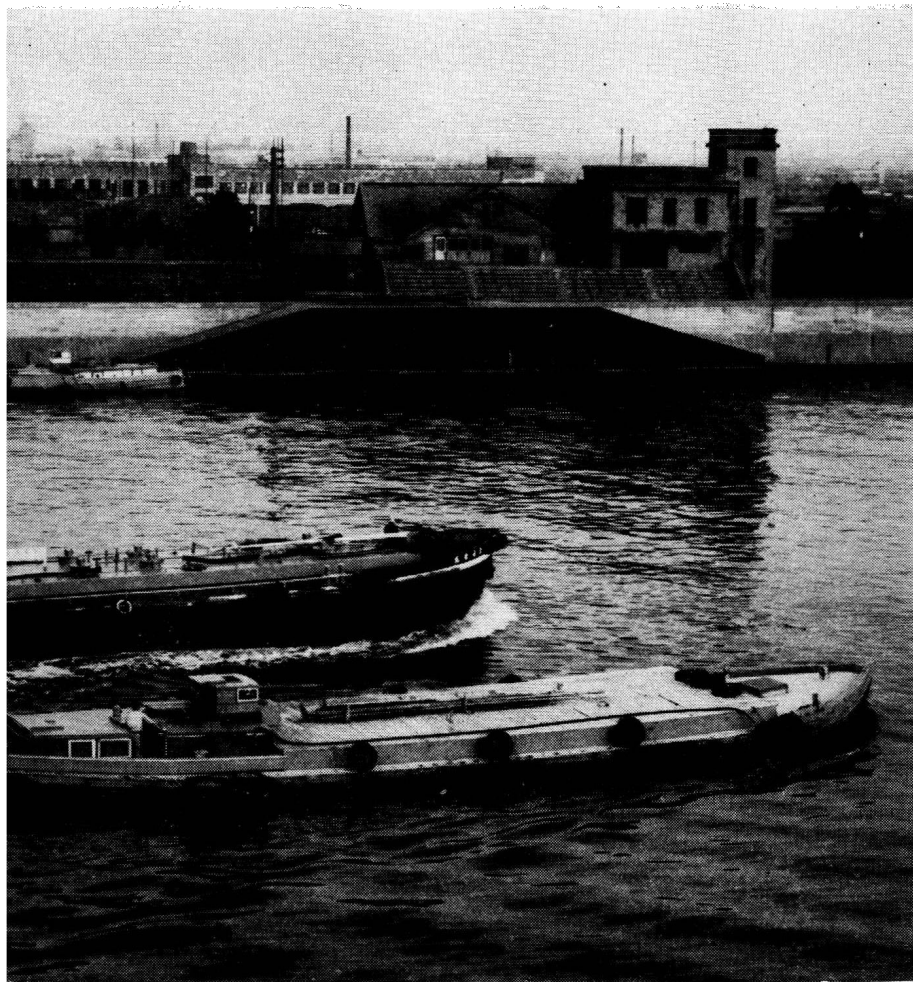
本巻協力者

右遠俊郎	岡保生	唐沢隆三	坂上博一	品川力	根岸隆尾	峯田義郎
武川忠一						

お茶の水図書館	昭和女子大学近代文庫	聖徳記念絵画館	東京女子大学比較文化研究所	早稲田大学演劇博物館	早稲田大学図書館
---------	------------	---------	---------------	------------	----------

近代の目ざめ

今戸より隅田川ごしに向島方面をのぞむ



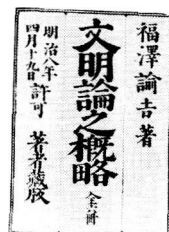
江戸から明治へ

おかげまいりの人波

大阪からお伊勢さまへ向かう道は、河内平野を横ぎり、暗峠から大和の国へはいって、奈良・丹波市・三輪・初瀬を経て伊賀の国（三重県）へはいり、青山峠を越えて伊勢の国（三重県）へと続いていた。文政十三年（一八三〇）の三月のころから、この道筋にはにわかに入々の往来がふえた。多くは貧しい人たちで、老若男女の別がなかった。彼らは、「おかげまいり」と書いた菅笠をかぶり、腰に柄杓をさすといういでたちで、この街道を、踊りながら東へ向かった。この年、阿波の国（徳島県）から始まったおかげまいりの熱狂は、たちまち諸国をおおい、百姓たちはもとより、妻は夫に、子どもは親に、奉公人は主人に無断で家をとび出しては、

伊勢参宮へとおもむくのであった。

おかげまいりというのは、男女群れをなして伊勢まいりをするものである。江戸時代には、慶安三年（一六五〇）に行なわれたのを初めとして、だいたい六十年ごとにくり返され、なかでもこの年文政十三年のおかげまいりは、それまでにない規模をもっていた。この年間三月には二百二十八万人の参拝者があったと、伊勢の山田奉行は報告している。皇大神宮のお札が降り、この年に参宮すれば特別の利益があると、どこからともなく言い出されると、その噂はたちまちにひろまり、人々は、ものにつかれたように伊勢へ向かった。「おかげでさ、するりとな、ぬけたとさ」と歌い踊り歩く姿は、大和盆地をよぎって果てしもなく続いたと



『文明論之概略』扉

いうから、日ごろおだやかな大和路は、にわかに騒がしきにつつまれたということが出来る。

それは、封建制下の民衆にとって、なんという解放感にあふれたひとときであつたらうか。年貢をおさめる道具とみなされ、土地にしばりつけられ、はなはだしいのは窓税、井戸税まで課せられた上、五人組で相互監視され、昼はもちろん板敷きの間をつくることすら容易でなかった農民にとって、そういう日ごろの重苦しさといっさい別の次元で生きることとは、なんとい



世直しの兆し だれがこんなにくさんのおれを降らせたのだろうか。倒幕派か佐幕派か、はっきりしたことはわからないが、「ええじゃないか」と隔り狂うこのような民衆の熱狂的な混乱に乗じて討幕計画は着々と遂行されつつあったのである。図は慶応3年のおかげまいりで一恵斎芳幾の筆になる。

う歓喜であつたらうか。役人も地主も主人も、そこにはなかった。参宮をとどめようとする者があれば、神罰がくだるといわれた。もとより貧しい人々が、おかげまいりの声をきいてとび出してきたのであるから、多くは無銭であつた。その人々に路銭や食物を施すための施行場が道中に設けられ、報謝の名のもとに米塩がふるまわれた。民衆のこうした熱狂ぶりは、封建性の重圧に苦しむ彼らの変革への胎動を、まだ盲目的ながらあらわしていた。支配階級にとってそれは、変革への無気味な地鳴りともいうべきものであつた。

生駒山脈の東にひろがる大和盆地が、東のかた笠置山地にせりあがろうとするところに、丹波市の町はあつた。古代豪族石上氏(物部氏)の石上神宮は、この町のそばにある。その丹波市の町でも、おかげまいりの人々への施行場が設けられ、近在の人々、ことに主婦たちは、かいがいしく群衆に響應するのであつた。文政十三年の春から始まったこのおかげまいりの熱狂は、大和盆地をいどった菜の花が消え、田植えが始まり、青々と育っていった稲が、たわわにみのった黄金色の穂先をたれるようになって、まだ絶えなかった。そ

の年の暮れには、文政は天保と改元されたが、その翌年にも春がくると、伊勢へ向かう人々の流れはふたたび増してきた。

中山みきという女

丹波市の施行場でたちはたらく人々のなかに、中山みきという主婦がいた。「善兵衛さん地持ち」とうたわれた中山善兵衛の妻で、文政十三年には数え年で三十三歳になっていた。彼女は、近在の大和の国山辺郡三昧田村の庄屋の娘として生まれた。子どものころから、針を持ったり糸つむぎをまねたりするのが好きで、七、八歳になると、親にかまってもえぬ近所の子どもと遊んでやったりした。子ども心にも、忍従にあけくれる主婦の姿に疑問をもったものか、「尼になりたい」と口ぐせのように言っていた。そんな性質がみこまれて、まだ十二歳のときに叔母のつぎ先である中山家から縁談がもちこまれ、父親の言うままに、彼女は年若い主婦となったのであった。「夜なべを終えたら念仏を唱えさせてください」というのが、とつぐさいの彼女のささやかな希望であった。

それからもう二十年の歳月がながれていた。いろん

なことがその間にあった。農家の嫁の生活は目のまわるようにいそがしい。炊事・洗濯・針仕事という主婦としてのきまりきった仕事のほかに、田植え・草取り・稲刈りなどの農事があった。またこのあたりでつくっている綿つみの仕事もあった。そんな仕事をみきによくこなしてきた。十五歳のときにへらわたしをうけて、名実ともに主婦となり、近所の気うけもよかった。子どもが生まれ、姑は世を去った。彼女はもう中山家にとっては、盤石のような存在であった。

しかしそういう生活に、みきが満足していたわけではなかった。家のために身を粉にして尽くす、なるほどそれは、模範的な主婦のありかたであったかもしれない。しかしそんな生活のなかで、自己をどこに生かすことができるか。その不満を彼女は信心によってまぎらそうとした。そのうえ夫の善兵衛は、地主の若旦那にはありがちの、家業にもさして身をいれないタイプの人間であった。おまけに女性にもふしだらであった。そういう夫に、みきは、「千里も隔たったような」心をいだいていた。みきの苦しみは、同時代の多くの女性の苦しみでもあった。彼女は、しだいにその苦し



天理教の教祖 教祖としての實録じゅうぶんで、どことなく神秘的なふんいきすら漂わせている中山みきの肖像だが、彼女ももとは家事の重圧と夫の放蕩に苦しむ平凡な農婦にすぎなかった。そんな彼女が世の中を見つめて新興宗教の教祖となったのには、おかげまいりと百姓一揆の力が大いにあずかっていた。

みをつめる主婦になっていった。周囲を見まわしてみると、いつのまにか、土地を失う農民がふえてきていた。生活できないで家出する人もおれば、一家で夜逃げする人も少なくなかった。間引きも行なわれた。窮乏に苦しむ農村をよそに見ながら、そのころ江戸は、いわゆる化政文化の時代であった。爛熟した退廃的な文化が、その時代を特徴づけている。その頂点に立つ十一代将軍家斉は、治政じつに五十年にわたり、歓楽的な生活を送っていた。そのような救いのない社会からの解放を求める気持は、民衆のだれの胸にも忍びよっており、おかげまいりというかたちで間欠的に爆発するのであった。中山みきが、おかげまいりの熱狂にふれたのは、ちょうどそういうときであった。そ

れは彼女に深刻な影響を与えた。

一揆と信心 文政十三年（天保元年）は、さいわいに

も豊作であった。しかしそのすぐあと

から不作の年が続いた。日ごろ窮乏している農民には、天災に対する抵抗力はなかった。東北地方をはじめとして、餓死する人が多く出た。だから農民は、実力で生活を守ろうとし、各地で百姓一揆をおこした。江戸時代における百姓一揆の件数は、文化・文政から天保にかけて急上昇する。今日までに数えられているだけで、文化年間十四年に二〇五件、文政年間十二年に一七四件、天保年間十四年に三八四件に達している。文化と文政にあつてはそれぞれ年平均一四・六件、一四・五件、天保にいたっては年平均二七・四件が発生したことになる。江戸時代を通じての一揆発生件数は、年平均一〇・七件であったから、その平均を、ことに天保期は大幅に上まわっている。天保八年（一八三七）には、大阪の与力である大塩平八郎が「救民」を旗じるしとして乱をおこした。つづいて越後の国（新潟県）柏崎では、その影響のもとに、国学者の生田万が、「救窮民」を志して反乱した。これらの乱は、

すぐに鎮定されたが、そのなかに民衆は、幕藩体制がいつとなく弛緩してきているのを感じとらずにはいられなかった。

こうした情勢は中山みきにも影響を与えていったであらう。ましてや大和は大阪から近い。変革への期待は彼女の胸を息苦しくさえしたであらう。そうしてそのように思わねばならぬ個人的な事情が、彼女におこってきた。彼女は、文政四年（一八二二）から天保八年（一八三七）にかけて、一男五女計六人の子どもをもった。しかし文政十三年には次女を、天保六年には四女をうしなった。そのうえ天保八年には、たったひ

とりの男の子だった秀司の左足が、急に病んで、それからのちきかなくなるという不幸に見舞われた。信心ぶかいみきにもそんな不幸があいついだのだ。それだけに彼女は、自分の不幸、世の中の不幸をなんとかして救えないものかと、ひとしお心を悩まさずにはいられなかった。

あととり息子（むすこ）の足がきかなくなることは、農家にとって決定的な痛手であった。だから、何をいっても治療しなければならなかった。山伏をよんで祈禱（きとう）してもらった。それがくり返された。みき自身も、五女を生んだあと体力が回復せず、同じように祈ってももらった。こうして彼女は、しだいに祈禱のふんいきになれ親しんでいった。もともと彼女は信心ぶかい女性であった。そこへおかげまじりの宗教的な熱狂と、目の前にみる山伏や巫女（みこ）の神がかりの状態が、二重うっしされて、彼女の心をふかくとらえた。とうとう天保九年（一八三八）十月二十四日、たまたま巫女のかわりをつとめているさなかに、みきは突然神がかりして、「われは天の神である」と口ばしした。夫をはじめ親戚（きんせき）までかけて、神がかりを解こうとしたが、むだだった。み

たちあがる農民のエネルギー

江戸時代、しほれしほるほどとれると胡麻の油にたとえられた農民の憤激（ふんげき）は百姓一揆（いぎ）となって暴発する。とくに日ごろ直接に自分たちを抑圧する地主庄屋に対する憤しきはすさまじく、一揆（いぎ）が起こればきまってまず彼らが血祭りにあげられた。そうした変革のエネルギーが幕府の権力機構を麻痺（まひ）させ、討幕（うく）を早める力になったといえる。



きの神がかり状態はますますふかく、「われは三千世界を救済するのである」と宣言するまでになった。十月二十六日の朝、夫の善兵衛が、根がつきて「それでは天の神さまにみきをさしあげます」と言ったとき、彼女の神がかりが解けた。こうして天理教が創始された。

陽氣ぐらし

大和の国の一農家の主婦の、救済者としての生活は、この日から始まった。

わたくしたち日本人は、それまでもまた今日でも、一神教の伝統をもっていない。日本人は、複数の神、つまり神々にたよる精神的習慣をもっていた。たとえば病氣をなおす神とか、安産の神とか、縁結びの神とかいうように。ところがみきがなろうとしたのは、「三千世界」つまりあらゆるものの救済者としての神であった。彼女は、こうして教祖すなわち生き神となった。そのことは、人々の苦しみが、もはや部分的なつくろいによつては救われないほど深まっており、彼らが、自分たちの全存在を一元的に救ってくれる人を待ちのぞんでいる状況を反映していた。ひとりみきばかりでなく、彼女と前後して、備前の国(岡山県)の神官であ

る黒住宗忠や備中の国(岡山県)の農民川手文治郎が、それぞれ一元的な救済者としての宣言を行ない、前者が黒住教、後者が金光教を始めているところからみても、救済への願望は、農民心理のしだいに高まりゆく底流となっていたことが知られるのである。それこそ変革期の心理であった。

神がかりをしたのちのみきは、手あたりしだいに施しを始めた。それは、いわゆる慈善としてではない。自分の身が本質的に傷つかない範囲での「善行」としてではない。もっと切迫した感情が彼女をとらえていた。「貧におちきれ」、これが彼女の感情であった。また意志であった。すなわち思想であった。最初に家財道具、つぎに屋敷、それから田畑、さらに山林、それらがつぎつぎに売られ、施しにあてられた。夫が死ぬところから、施しには加速度がついた。「地持ち」とうたわれた中山家は、今は月かげのもる小屋住まいとなった。それでもみきの心は明るく、彼女はこう言うのだった。「ものを施して執着をなくすと、心に明るさが生まれる。心に明るさが生まれると、しぜんに陽氣ぐらしへの道がひらける」と。どんな底生活のなかで、